

### お届けしたい「声」がある



▲  
喜びを分かち合いたいと、後進の育成に力を注ぐ前田さん(右) (「点字文庫」録音室で)

**音** 訳で日が明け暮れする日々——。ほぼ毎日、朝から夕方まで「天理教点字文庫」音訳室でひのきしんに励むのは、前田佐千子(63歳・教会本部ようぼく・天理市)。「テープ／CD版『天理時報』」の企画・編集をはじめ、ひのきしん者が録音した音声源を確認・校正する作業などを一手に引き受けている。

前田の声かけにより、ひのきしんを始めた人も少なくない。「音訳ひのきしんの喜びを共に分かち合いたくて」

22年前、修養科の課外講習で音訳と出合った。信仰初代。お道の刊行物を音訳するひのきしんを通して「教えを深く学ばせていただいた」。

「その時々自身が悩んでいることに、ぴったりの内容の記事や本を音訳する機会が多くて。それで何度も心の向きを変えていただいた。これまで音訳を通して、数えきれないほど多くのものを得ている」

忘れられない出来事がある。

6年前、東京に住む旧友が、がんを患った。彼女の願いは、「あなたの読む夏目漱石の小説が聞きたい……」だった。

抗がん剤で心身ともに弱っている友人の耳に、少しでも優しい声を届けたい——。「聞き取りやすい読み方とは……」と、何度も自身の読み方を見つめ直しては、試行錯誤を重ねた。

どうか、この続きを聞いてもらえますように——。1本収録するごとに、そう願いを込めて発送したテープは8本。しかし残り2本は、友人の耳に届くことはなかった。

「2本のテープは、妻の仏前に供えさせていただきました」

後日、友人の夫から、そう連絡が入った。

「聞き手の立場に立つ。ただ単に“読む”のではなく“寄り添う”ことを考える。あのとき、音訳の原点に立ち返れた」

本部神殿に参拝してから、音訳室を訪れる。それは、心を澄まして親神様のメッセージを体いっぱい受け取りたいとの思いから。

「お道の刊行物に、そのメッセージをいっぱい詰めたくて」

その声は優しく、柔らかい。

(文中、敬称略)